

多彩な組織成分を伴った浸潤性尿路上皮癌の1例

◎大貫 史明¹⁾、小溝 亜子¹⁾、阿部 英智¹⁾、江幡 清美¹⁾、荒木 仁美¹⁾、深澤 政勝¹⁾
筑波学園病院¹⁾

【はじめに】浸潤性尿路上皮癌において、扁平上皮への分化を示す成分や神経内分泌腫瘍の成分、肉腫様成分が混在して認められる症例は極めて稀である。今回我々は、右下部尿管に発生した多彩な組織成分を伴った浸潤性尿路上皮癌の1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】70歳代女性。右腹部痛で近医より当院紹介受診。腎機能の低下もあり、腹部CTが行われ、右下部尿管に腫瘍性病変が指摘された。その後の尿細胞診にて、扁平上皮への分化を伴う高異型度尿路上皮癌が疑われた。また、MRI検査やカテーテル尿の細胞診でも、悪性腫瘍が疑われ、後日、右腎尿管全摘術が施行された。

【細胞所見】当院初回の自然尿の細胞診では、好中球や赤血球が目立つ中、N/C比が極めて高く、核腫大や核形不整がみられ、核クロマチンが増量した異型細胞が小集塊あるいは散在性に多数認められた。一部、OG好染性の異型細胞もみられ、扁平上皮への分化を伴う高異型度尿路上皮癌と診断した。カテーテル尿の細胞診でも壊死物を背景に、

同様の異型細胞が多数認められた。標本を見直すと、軟骨様基質が示唆される無構造物質がみられた。

【組織所見】多彩な組織像を示す腫瘍で、浸潤性尿路上皮癌に加え、扁平上皮への分化を示す成分、分化度の低い癌の成分、軟骨肉腫様の成分が認められた。分化度の低い癌の成分はCD56陽性、synaptophysin弱陽性であり、神経内分泌癌と考えられた。扁平上皮への分化を示す成分は、p40、D2-40、CEA陽性であった。軟骨肉腫様の成分は、S100陽性であった。いずれの成分もp53がびまん性強陽性であった。

【まとめ】尿路上皮癌が細胞診で疑われる症例では、多彩な組織成分が出現することが稀にあることを念頭に診断することが重要である。とくに小細胞癌成分や肉腫様成分がある場合、極めて予後が悪いことがあるために注意が必要である。本症例の経験を通して、浸潤性尿路上皮癌の中には様々な組織へ分化する症例があることがあらためて認識された。

筑波学園病院 029-836-3645